

去る程に渡辺の源治綱は、九条羅生門にて鬼神の腕を切り取りつつ、武勇を天下に輝かせり  
さりながら斯かる悪鬼は七日の内に、必ず仇をなすなりと、陰陽の博士晴明が考文にまかせつつ、綱は  
七日の物忌して、仁王経を誦誦なし、門戸を閉ぢてぞ居たりける

〔ワキ・綱〕すでに東寺羅生門の、鬼神の腕を切り取りしこと、是偏に君の御威徳ならずや、然るに  
晴明が考文に随ひ、あら氣詰りの物忌やな

〔シテ・伯母〕斯かる所へ津の国の、渡辺の里よりも、尋ねて伯母の北時雨  
紅葉の笠も名に愛でて

錦をかぎす古郷の  
老の力や杖つきの字の姿をも

うしとは言はでひかれつる、綱が館に着にけり

門の外面に佇みて

〔シテ〕いかに綱、津の国の伯母がはるばる参りたり、此の門開き候へ、とく明け召されい

〔ワキ〕内には綱の声高く、はるばるとの御出なれど、仔細あつて物忌なれば、門の内へはかなはず候

〔シテ〕何門の内へは叶はぬとな

〔ワキ〕是非に及ばず候

〔シテ〕あら曲もなき御事やな、和殿が幼き其の時は

自ら抱き育てつつ

九夏三伏の暑き日は、扇の風にて凌がせつ、厳冬素雪の寒き夜は

襖を重ね暖めて、和殿を綱と言はせし事、皆自らが恩ならずや、恩を知らぬは人ならず、エエ汝は

邪慳者かなと、声を上げてぞ泣き給ふ

〔ワキ〕さしも猛き渡辺も、あくまで伯母に口説かれて、是非なく門を押し開き、奥の一間へ招じける

〔シテ〕いやとよ綱、鬼神の腕を切りとられし武勇の程、凡そ天下に隠れなし、して其の腕は

何れにありや

〔ワキ〕即ち是にと唐櫃の、蓋打ち明けて伯母の前にぞ直しける

〔シテ〕其の時伯母は彼の腕を、ためつすがめつ繁々と、眺め眺めて居たりしが、次第次第に

面色変り、かの腕を取るよと見えしが忽ちに、鬼神となつて飛上り

破風を蹴破り現はれ出で、四辺を睨みし有様は身の毛もよだつ許りなり

いかに綱、我こそ茨木童子なり、我が腕を取返さん其の為に、是まで来たと知らざるや

綱は怒りて早足を踏み

斬らんとすれども

虚空に在り

いかにかなして打取るべしと

おもへど次第に黒雲掩ひ、鬼神の姿は消失せければ、彼の晴明が考文に背きし事の口惜しさよ、猶時を  
得て打取るべしと、勇み立ちたる武勇の程

感ぜぬ者こそなかりけれ